

報告事項 ケ

第18回鳥取県教育審議会の概要について

第18回鳥取県教育審議会の概要について、別紙のとおり報告します。

平成29年3月18日

鳥取県教育委員会教育長 山 本 仁 志

第18回鳥取県教育審議会の概要について

教育総務課

- 1 日時 平成29年2月16日（木）午前10時～正午
- 2 場所 白兔会館「らいちょう」
- 3 出席者 教育審議会委員（21名）



4 概要

(1) 会長選任

- ・山根俊喜委員（鳥取大学教授）に決定。
- ・職務代行者は三木裕和委員（鳥取大学教授）に決定。

(2) 報告事項

①「コミュニティ・スクールの推進について」

<委員意見>

- ・コミュニティ・スクールのような形で学校が運営され、社会教育主事の資格を持った地域連携担当教職員が配置されるのは、自治体の立場としては賛成である。しっかりと下支えしていきたい。
- ・県内の先行事例（倉吉市、伯耆町、南部町）を見ると、上手くいっているところには、地域の人と上手に繋げることができる地域コーディネーターの存在がある。
- ・地域との連携を前提としながらも、学校としての自主性をどう確保していくかを改めて考える必要がある。教育目標や教育内容は、教育基本法などにより運用され、学校教職員は教員免許という専門性を持った組織である。学校独自の主体性、自立性を基本として、地域と連携するというを確認しておく必要がある。

②「今後の県立高等学校の在り方の検討状況について」

<委員意見>

- ・県立高等学校は、地域の人々がそれを支えるという気持ちが必要。日野高等学校について、日野郡では教育委員会が自信を持たせるような学校運営などの仕掛けを行っている。学校が地域と一緒に有り続けるということがとても大切。
- ・私立高等学校を見ても、独自の学校運営、教育理念、学問、部活動など、力を入れているところはどんどんと強くなり、強いところには強い者が集まる。県立高等学校も特色ある取組が必要。例えば岩美郡や日野郡は、地域おこし協力隊を入れて地域のメッセージとして取り組んでいる。各市町村長、あるいは地域の各団体と協力して、地域づくりの核としての県立高等学校を作っていただきたい。



- ・児童生徒数が減少している一方で、学校に行きたくても行くことができない生徒が増えているという現実がある。不登校等の理由で、他に行く場所が無いため特別支援学校に入学を希望する子どもたちがいる。地域の学校というお話が出ているが、もっと広く鳥取県の子どもとして考え、生涯引きこもりにするのか、それとも立派な社会人として育てるのか、ということも重要。



- ・学校に適応できない子どもを見ると、基本的な生活習慣がきちんとできていない場合も多い。そういう意味で、日野高等学校に寮が設けられるというのは、とても良い取組だと思う。
- ・平成30年度から、高等学校における通級指導教室が始まる。また、将来的に高等学校に特別支援学級が設けられる可能性は高い。義務教育段階の特別支援学級の児童生徒数は、この少子化においても、毎年一万人ペースで増えている。その子どもたちが義務教育を終えた段階で、特別支援学校に行くのか、それとも高等学校が受け止めるのか、それはもう現実的な課題となろうとしている。
- ・高等学校において農林水産人材を育てるということは大切だが、受け入れる産業がないといけない。そういった産業との連携した施策展開が必要。

③「生涯学習振興施策の見直し状況について」

<委員意見>

- ・⑤全ての報告事項に共通した意見に記載。



④「鳥取県立美術館整備基本構想について」

<委員意見>

- ・中間とりまとめの必要性に記載してある「県民の創造性と鳥取県の魅力の向上」は、地域の方々が鳥取の魅力を知り、県民のプライドを醸成していくということで、とても重要だと思う。
- ・美術館は社会機関の一つであるが、北海道の帯広では、生徒が少なくなった結果できた空き教室をアトリエとして利用し、アーティストに何かを製作してもらったり、ダンスをしたり、また子どもたちとワークショップをする等、子どもたちの創造性を高める取組を行っている。



自ら考え、何かを創り出すということは、子どもたちにとってとても重要であり、そうすることで他の教科の成績も上がっているという調査結果もあると聞く。また、長野県の学校では、子どもたちがキッズ学芸員となり、夏の二日間、学校を丸ごと美術館にし、子どもたちの自発性を高めている。さらに、島根県浜田市の世界子ども美術館では学校との連携を大切にしており、バスを出し、全ての学校が美術館を訪問するような取組を最初の段階から行っている。美術館は、鑑賞だけでなく、創造ということも重要で、これらの事例はおもしろい。

- ・美術館構想で、教育普及について触れられているのはありがたい。ジュニア県展では、毎年夏休みを利用して応募し、教育長表彰を受ける子どもいる。また、土曜授業のときに高等学校の書道部の書道パフォーマンスを見ることもある。さらに、中部地区の版画で特選をとった子どもの作品が、現在倉吉市立博物館で展示されている。このように、子どもたちの作品の発表の場となり、県民みんなのための美術館となれば良いと思っている。

⑤全ての報告事項に共通した意見

- ・今回の報告事項は全て意欲的な取組だと思うが、キーワードとしては、ネットワーク・連携ということと、人材育成という二つが大きなテーマとなっている。報告のあった四つの取組を分断させることなく、連携した取組、施策として総合的、包括的に考えるのが非常に効果的。
- ・今回の四つの報告では、地域との連携ということが考えられる。子どもたちが、将来自分がこの鳥取県でどうなっていくのか、そんな将来像が具体的に见えることが必要。さらに、それを一つの地図として、それらの事業がどういった部分を担っているのか、一般の方々にも具体的に分かりやすく示すことが大切。
- ・倉吉市は今年、山上憶良が伯耆の国主として赴任してから1300年を迎え、それにちなみ短歌を募集したところ、全国47都道府県だけでなく、ニューヨークからも応募があった。因幡の伴家持、伯耆の山上憶良、島根県の柿本人麻呂というように、我々は全国と繋がる大きなツールを持っており、それは世界にも繋がっている。ローカルを目指しながらグローバルな世界と繋げていくチャンスはいくらでもある。それぞれの市町村の中で生かせるものはたくさんあると感じた。
- ・四つの報告事項を聞いていると、文部科学省から降りてきた題目に対し、一つ一つ答えようとしていると感じた。大切なのは、そこにどれだけ鳥取県のユニークなものがあるのか、お金をどう利用していくのかということ。鳥取県の特徴は、人口が日本で一番小さい、つまりマネジメントしやすい。つまり、あるビジョンと理念を持って、国の問題と地方の問題を同時に配慮しながら、それで国の問題を地方で解きやすい場合はかなりあると思う。国から降りてくるものをするだけでなく、逆にこちらからやらせてくれと攻めていくことをしないといけないと感じた。
- ・学びというのは、子どもたちが持っているものを引き出すということ。生徒の発達段階に応じて考えさせること、生涯を通じた学び、子どもたちが体験する美術館、そういう感動をもたらす場所を作るともとても大切。
- ・一方通行の教えではなく、主体的、対話的、深い学びはとても重要。また、先生がしっかりと準備をし、コンパクトに教えていくことも大切。そういった意味ではICTの活用も必要である。

